

4 チャールズ王が見た幻影

- チャールズ王は たったひとり
寂しい城の塔の中に座っていた
重苦しい呻き声が聞こえたのは
真夜中の静寂しじまの中
- 声のする方へ振り向いたが 5
誰もいない
夜鳴き鳥が
恐ろしい金切り声で鳴くばかり
- 音のする方へ 10
アーチ形の窓の方へ振り向いた
「やつは光に気が付いた」と声があったが
どこから聞こえるのか判らない
- 夜の闇を覗き込んだが 15
夜の静寂しじまがあるばかり
だが 大きく明るく輝く光が
赤く眩しく輝く光が流れ込んだ
- 象牙の鞘から 頑丈な頼みの鉄剣を
チャールズ王は引き抜いた
片手でランプを掲げると
光は薄青くゆらめいた 20
- 塔の扉を開けたが
鍵かぎが軋こごんで扉は閉じた
「処女マリアにかけて」と王は闇夜に叫んだ
「ありえないこと」
- ゆっくりと 薄気味悪い塔の扉が開き 25
ゆっくりと 再び閉じた
内からも外からも そこかしこから
声が聞こえてきた

チャールズ王は茫然と立ちつくした
その声が王の名を次々と呼んだのだ
声のする方へ歩いて行くと
円柱で囲まれた謁見の間が現れた

30

高いところに彫刻が施された
四十八本の円柱が
(両側にそれぞれ二十四本)
荘厳な部屋に林立していた

35

生死をかけた戦に明け暮れ
激しい攻撃も受けたチャールズ王
赤い血に染まった戦場を 幾度も
昔も今も 闊歩してきたチャールズ王

40

その王の心も この恐ろしい真夜中に
かつてないほどの恐怖に怯えた
目は血走り 髪は逆立ち
茫然自失となった

青い光が 謁見の間をぐるぐると
燃えさかる輪となって巡っていた
死の音が カチカチ鳴る歯が
薄気味悪くまくしたてる舌が語り始めた

45

王は見た 二十四人の元老たちが
どっしりとした円卓に着いていた
それぞれが手に本を持ち
中には秘義が書かれていた

50

彼らの四肢は燃えるような鋼の鎧に包まれて
頬には怒気が閃いた
甲冑を着込み 兜をかぶり
眼窩は火を噴いた

55

権威の笏を持ち 輝く黄金の冠を戴き
烏の濡羽色した髪を蓄え
円卓の王の位置に 堂々と
王らしきものが座っていた

60

深紅に染めて 白い毛皮で縁取りし

宝石をちりばめ
川面に太陽が照り映えるように
絢爛豪華なローブを纏っていた

誇り高き王冠を飾る宝石の輝きは見事だが 65
ローブを飾る宝石は見事だが
鎖帷子の付いた胴衣は見事だが
すべては血糊で汚れていた

目は怒りを放ち 眼差しは火を噴き 70
姿は威厳に満ちていた
そのものの合図で 元老たちは秘義の本を打ち
影のような手を挙げた

首切り人が側に立ち 斧を高く掲げて
次々と 瞬時に斧を振り下ろした
鋼の斧が樫の木に当たる度に 75
断頭台は打ち首の音を木霊した

短く低い叫びが聞こえた
一撃で命を断たれた惨めな罪人どもの声
生首は血染めの踏み石の上にストンと落ち
生暖かい生き血が流れた 80

現の王が 幻の王に尋ねた
「このおぞましい光景は何だ」
幻の王が 現の王に答えた
「未来の悲劇の予言」

現の王が 幻の王に尋ねた 85
「聖ペテロにかけて おまえは誰だ」
幻の王が 現の王に答えた
「わたしは未来のもの 現世のものではない」

現の王が 幻の王に尋ねた
「おまえの時代はいつ来るのだ」 90
「おまえから六代目に兵士が生まれる
その兵士がこのわたし

「この世の王たちはわたしの誕生に色を失い
征服が始まろう

- 王国は乱れ 民は震え 95
王権はわたしの前に失墜しよう
- 「古都クラクフはわたしの權威に屈し
傲慢なデーン人は頭^{こうべ}を垂れ
ポーランド人は わたしの鋭い眼差^{まなざ}しと
眉根を寄せた面がまえから逃げ去ろう 100
- 「わたしの行く手には 火を噴く砲弾が飛び交い
赤い舌の火の手が上がり
わたしは真夜中の海に漕ぎ出し
暗雲垂れる冬空の下を進むことになろう
- 「狭い道を抜け 暗い湿地を横切り 105
疲れきって荒野を渡り
大河の深みの上に張った氷と雪の上を行き
ウクライナの森を抜けて行くことになろう
- 「人生の終わりは嘆きに満ちて悲しくとも
命を狙う見えない手があるとも 110
あらゆる国で いついつまでも
わたしの栄光の征服は語られよう
- 「血が流され 大地は赤く
悲しみの血糊に染まろう
この炎のようにすばやく わたしの名声の光は 115
広き世に輝き渡ろう」
- ^{まぼろし}幻の王が語り終えると 夜明けを告げる^{とり}鶏が鳴いた
華やかな光景も
^{きん}黄金の輝きも 元老たちも
夜の闇へと消え失せた 120

(中島久代訳)